

聖成吉思汗の家譜

山 本 守 譯

今蒙古文の“Bokda Činggis hagan u Čadir”を譯すに當つて、一言本書解説を述べて置かう。

本書は一名「成吉思汗傳」と云ふ。然し文字通り譯せば、「聖成吉思汗の家譜」と爲すべきであらう。その内容が成吉思汗一個の傳でなくて、北元の諸汗の世系まで敘してある事よりしても、家譜と云ふ方が妥當である。

扱本書が何時何人によつて編纂されたものかに就いては知る所が無い。只蒙文書社の刊本によつて、その存在を知るに過ぎない。本刊本は全九十六葉で、その前部三分の二は *altan tobci* に據つたものらしく、第六十二葉裏に

蒙古諸汗の根源綱要を記せる *Altan tobci* と名附くる史終れり。

とある。後の三分の一は成吉思汗に關する別個の記録

—所謂「喀喇沁本蒙古源流」は、その一部を収録して、これに「成吉思汗行軍紀」なる見出を附して居る—を收む。この事は曩に私が喀喇沁本蒙古源流の事を述べた際（史林二十卷三號）に一言して置いた所である。

この二文獻中、後者に關して私はその性質を明にし得ないのを遺憾とするが、前者である *Altan tobci* は西曆一六〇四年に作られたものらしく蒙古源流或は喀喇沁本蒙古源流—この兩者は單なる異本で無い事もすでに述べた通りである。—に根本的な材料を提供したもので、明代蒙古史研究上看過すべからざる重要文獻たる事は今更贅言を要しない。然し本書は極めて稀觀の書にて—一八五八年 *Galsan Gomboev* が *Petersburg* にて刊行す。—この書の利用は仲々至難である。然し幸にして前掲表題の書中に収録されて居る爲に—本刊本が原刊本と相當の差異ある事とは思はれるが—取敢

をその譯文を發表する所以である。この譯文が蒙古史研究者の一助ともならば譯者の幸これに過ぐらゝは無し。

尙本書の地名人名の譯字は、その音に差異なき限り、蒙古源流の譯字を用ひ、然らざる時は括弧内に記す。

註◎◎ Lafter; Očerik Mongolskoi literatury. (P.47)

參照

譯文(第一回)

尊菩薩の族を 智能ある上帝の族を 印度西藏より 此方に傳へたる事を 少し集めて述べよう。世界の人類が、適切に行ふ事なき爲に 金佛命に依りて瑪哈薩瑪廸を 鄂蘭訥額爾古克德克森と宣揚せり。

印度の最初の汗は Maha Samadi 汗(瑪哈薩瑪廸蘭咱)であらうか、その子 Üjsgülieng gerel tu hagan(羅旺)その子 Buyantu hagan(噶里雅納汗)その子 Tegin asaraki hagan(武特博哈達汗)その子 Namagi hübe(滿達達)その子 Dürben tib i ejeleki altan хүртүтү hagan 其子 Üjsgüliengtü gorban tib i ejeleki müng-

gün хүртүтү hagan 其子 Masi Üjsgüliengtü hoyar tib i ejeleki yas хүртүтү hagan 其子 Sain Üjsgüliengtü nigen tib i ejeleki temür хүртүтү hagan 其子 Tegüs Üjsgüliengtü hagan これ等五人を Zakrawardi hagan と呼んだ。

Tegüs Üjsgülieng tu hagan の子 Talbiki hagan 其子 Talbin bariki hagan 其子 Sigiüni hagan 其子 Güsi hagan 其子 Yehe Güsi hagan 其子 Sain Üjiki hagan であらうか。瑪哈薩瑪廸汗の金族から分れた Gerge hagan 其子 Sain türil tü hagan の汗より漸次分れた諸汗の最後の汗は Arsalan ohoci tu hagan (星哈哈怒)とその子 Arigun idegetü hagan (蘇都達納) Cagan idegetü hagan (積克洛達納) Tangsok idegetü hagan (多羅諾達納) Rasiyan idegetü hagan (阿密爾都達納)である。

長男 Arigun idegetü hagan 二十ある、長男 Burhan baki (薩爾翰阿爾塔) 次男 Üjsgülieng tu andi (錫迪南廸) Cagan idegetü hagan の子、長男は Nasuna tegülder ilagaki (廸霞) 次男 Tegüs sain (已廸理蒙)。Tangsok ibegetü hagan の子、長男は Nasuna

teğüder yehe (瑪哈納瑪) 次男 ülü türetükü (阿尼魯達) Rasiyan idegetü hagan の二子、長男 Dryadar (德幹達特) 次男阿南達である。Sigemüni の子 Rahoi^o Rahoi が僧となつた爲に Arigün idegetü hagan の族は絶えたが、多くの史に絶えたる事無しと云ふ。釋迦牟尼、Rahoi と云ふもの、Arigün idegetü 汗が涅槃に入つて千餘年に成つて後、瑪哈薩瑪廸汗の金族から、東方雪ある山腹に興つた事情は、斯くの如くであらうか。印度の瑪噶達國の Hüsele hagan の子 Sarba と名附くる可汗に五子あり。末子は生來青色の毛ある手、扁平な足をして居り、目は下から上に閉ぢる爲に、これ前の族に同じからずと言つて、銅の箱に入れて恒河に投入れた。Babo (Nepal) 西藏の兩地の間に、西藏の老爺が河の邊から、この箱を得て開けて見れば、一人のみめ善き子供あり、取つて養つて十六歳となつた時地の高き善きを搜して、雪ある善布山の四屋の地を想起して、「そこに」家を營さんと來る途に、西藏の人口會つて、「何處から來た人であるか」と尋ねた所、上方を指し示した。西藏の人云ふに「この子は天命あるものであらうか。我々西藏の國に汗が無い」とて自分の

頸に載せて取つて行つた。これ即ち西藏第一の Hüitügün sandali tu hagan であるか。その子 Erhin tologan hüinün sandali tu hagan 其子 Hii yarbo sibagun sandali tu hagan 其子 Hüri hüitük gal bolor sandali tu hagan 其子 Hüin sübin morin sandali tu hagan 其子 Dalai sübin atan sandali tu hagan である。この汗三子あり、長男博羅咱、次子 Sibaguci (且持) 末子布爾特齊諾であらうか。彼等の間がうまく行かなくて、布爾特齊諾は、北方騰吉斯海を渡つて、Jet の地に來たつて、夫なき郭幹瑪喇勒と呼ぶ娘を取つて妻となし、Jet の地に家を營んで住み、蒙古部族となつた。

布爾特齊諾の子 Batai Yagan (必塔察干) その子 Temujin (特黑徹克、秘塔馬察。Temujin は誤ならん) その子和哩察兒篋兒干、其子阿固濟木博郭囉勒其子薩里噶勒濟固其子 yehe nidon (尼格尼敦) 其子薩木蘇齊其子 Sali hatcahu (哈里哈爾出、秘合兒出、本文 Sali は誤ならん) 其子博爾濟吉臺墨爾根其子 Torgaijin Bayan (都喇勒津巴延) この人の妻は博囉克沁郭幹である。蒙古諸汗の最上は第一の成吉思汗である。その子諤格德依その弟 Hüitük hagan (Hüitük は hüyük の誤、

庫裕庫汗は太宗の子、弟に非ず) 其弟 Münge hagan (蒙哥汗は拖雷の子定宗の弟となすは誤) 其弟忽必烈汗その弟 Ujeitu hagan (特穆爾、殿本は諤勒哲衣に作る成宗は世祖の孫也) 其子 Hülik hagan (海桑殿本は庫魯克に作る、順宗の子) その子 Buyantu hagan 阿裕爾巴里巴特喇汗。殿本作布延圖汗。仁宗は武宗の弟、子と爲すは誤) 其子 Gegen hagan (碩迪巴拉。殿本作格根汗。英宗なり) 其子伊遜特穆爾汗 (顯宗の子にして英宗の子に非ず) 彼の後に Jayagatu hagan (托克特穆爾。殿本作濟雅噶圖汗) 彼の後に Horoktu hagan (和錫拉、殿本作琳齊必納汗) その後に İcarnal hagan (額琳沁巴勒) その後に Ubagatu hagan (托歡特穆爾烏哈葛圖汗) 其子 Bilek tu hagan (阿裕錫哩達喇汗) その子 Oshai hagan (特古斯特穆爾汗) その子 Joriktu hagan (恩克卓里克圖汗) 其子 Elbek hagan (額勒伯克汗) である。其後衛喇特的巴圖拉丞相が蒙古の大統を取つた。其後 Togogan hagan (琨特穆爾) Oloi temür hagan (額勒錐特穆爾) Delbek hagan (德勒伯克汗) Uyaraqai hagan (額色庫汗) Atai hagan (阿岱汗) あり、彼の後蒙古の大統を衛喇特的托歡太師が取つた。その

後位總汗あり。再蒙古の大統を衛喇特的額森太師が取つた。其後 Maha hügis hagan (烏珂克圖汗) Molon hagan (摩倫汗) Mantogui hagan (滿都古勒汗) Bayan münge bolju jinong (巴延蒙克博勒呼濟農) あり、その子 Batu münge sain tayun hagan (巴圖蒙克即達延汗) あり、其後甥なる Bodi alak hagan (博迪阿拉克汗) 子なる Daraisung hüteug hagan (達賚遜庫登汗) あり。其後 Barsu bolot jinong (巴爾斯博羅特濟農) の子 Gegen alan hagan (阿勒坦汗) Tümen jasak tu hagan (圖門汗) Buyan seçen hagan (布延汗) Sengge temür tügüreng hagan (僧格都古楞特穆爾) その子 Sümir mergen taiji (蘇密爾岱吉) その子達賴喇嘛の化身 yuntan jansu (蘊丹札木素) あり。その後 Buyan seçen hagan あり、その子 manghok mergen taiji (莽和克臺吉)、其子靈丹胡土克圖汗その子額爾克洪果爾台吉其子 abkai ün wang (清史稿) 阿布鼎親王、abkai は誤) その子 Burnai ün wang (清史稿) 布爾尼親王) ありて (凡て) 四十二代。(明代世系につまきは疑義多し) (三十一頁以下の本文に於て註す)

多斡索和爾、多博墨爾根二人の子供あり。多斡索和爾の額の最中に一つの目あり、三站の地を見る事が出

来る。Tajir, bolo 二頭の馬を有つて居た。多幹素和爾は弟多博墨爾根を連れて布爾干山(秘史不兒罕)の上に登つて居る時、推朗噶嚕廸から通格里克呼嚕觀(秘史統格黎克豁囉罕)を下つて、一つの遊牧民が来るのを、多幹素和爾が見て、弟多博墨爾根に云ふのに、「あの進んで来る遊牧民の車の中に一人の娘が乗つて居る。その娘の光はこゝから見える」と云つたので、弟は行つて見れば、眞に一人の娘が居たので、多博墨爾根は其娘から尋ねて、「弟は何れの民か」と云ふに、彼娘曰く「我等は土默特(秘史)の Honokai mergen (郭哩岱墨爾根)の巴喇郭沁郭幹(秘史) (史巴兒忽眞豁阿) から阿哩克烏遜の邊に生れた阿掄郭幹(秘史) (史阿蘭豁阿) と名附くる娘で私はある。」と答へたので、多博墨爾根は彼女を娶つて妻となし、後二人の子を持つた。長男は不固塔哈吉次男 Bohoci saici (博薩多克勒濟固(秘史) 不合禿撒勒只。以上二人は父の死後生れたるものにて本書に生前の出生と爲は誤である) Bohoci saici は Balcigut (薩勒卓特) 姓となり不固哈塔吉は Haragit (哈塔錦) 姓となつた。多博墨爾根身歿して後、妻阿掄郭幹は夫無しに在りながら、Bikder (伯袞德依(秘史) 不古訥台 Bikder と爲すは

後の成吉思汗の兄弟の Bikder と誤つたものであらう) 伯勒格特依(秘史) (史別勒古訥台。以上二人は父生前の子である) 孛端察兒(秘史) (史孛端察兒蒙合黑) と名附くる三人の子を生んだ。これに對して不固哈塔吉 Bohoci saici 二人(實は此二人に非ずして伯勒格特依伯袞德依の二人)で疑を生じて、秘かに論ずるに「我々のこの近くに人無くしてこの子は誰のであるか」と言つて居るのを、母阿掄郭幹知つて云ふに「お前等二人の子よ、私を疑ふのは汝の道理あり。」と云つて、二人の子供に、一個づゝの箭を與へた。「二人は」直に一本の矢を折つた後で五本の矢を與へるに、折る事が出来なかつた故に、阿掄郭幹が云ふのに「お前等五人で合すれば、力これに同じく強くなる。この三人を得る時には、暗夜黃き光の子となつて入つて來た。室は光明く輝いて、私の腹を撫で、出て行く時には、黃い禿げた犬となつて、自分の舌、口を嘗めながら出るのである。これに由つて思ふに、天の彼方から命あつて來る子であらうと、私は考へる。」と云つた。

兄弟五人で遺産の分け前を譲り受ける時に、孛端察兒に背中に瘡ある、Hongang sirhoi なる馬を與ふるに

李端察兒曰はく、「死なうと如何ならうと天命だ。」と言つて、鄂諾江(秘史)を溯つて行つた。狼が牝鹿を峰の穴に匿して居るのを見て、竊に近づいて射殺してその肉で糧食を作つて暮した。この鄂諾江の源に、草の菴の家を建て、住む中に、灰色鷹が野雞を捕へて居るのを見て、馬の尾の套おなで捕へて、野雞を放つてやつた。喀爾喀江を下の方に、鷹を放つて行くに一部族あり、即ちそこに馬乳を飲んで行つた。後に彼の兄 Bicker (7) は鄂諾江を上つて「我々の一人の弟が行つてしまつた。死んだか否か」と尋ねて来る中に、この部族に到つた。「こゝに一黄駒を持つた子供を見ないか」と尋ねた時に、この部族の人が云ふのに「こゝに一人の子供が居る。一黄駒を持つて居り、一羽の黄鷹が居る。毎日馬乳を食べて暮して居る。汝彼方此方と搜す勿れ。こゝに待つて居れ」と言つた。その中に正午の頃雲なくして、雨がバラ／＼と降つて来る。この部族の人云ふのに「汝見よ、そこにはもう近づいたではないか」と言ふ間に、久しからずして李端察兒はそこに到着して來た。李端察兒は鳥を取つた羽を（取つた鳥の羽をの意）風の儘に鄂諾江を下の方に、鳥の羽の雨

を降らし雪の如く飛散させた。そこで兄弟二人で出會つて、一緒に歸つて來た。歸つて來る時、李端察兒は兄 Bicker (7) に云ふのに「人には長あり、衣服には襟ありと言ふ。我々はこの部族を討たう」と云ふに兄は「我々兄弟は家に歸つて相談しよう。」と云つて家に歸るや、兄に話して、兄弟五人で相談して、遂に其の部族を討つて取つた時に、李端察兒は妊娠せる娘を捉へて取つた。李端察兒の子 Haböi Inüik (哈必齊巴圖爾) その子拜星呼爾多克申。(秘史)史伯升豁兒多里申に作り海都の子とす) その子 Tombhai seen (托木巴該薛禪) その子哈布勒汗その子巴爾達不巴圖爾その子伊蘇凱巴圖爾(秘史)世速該巴阿禿兒)

伊蘇凱巴圖爾は、Darai nūhan 二人の弟(これ一人の名にして二人に非ず、達哩岱誇濟錦)を連れて獵に行つてゐる間に、一天馬が突然ビューと隠れた。却つて一婦人がそこに小便してあつた。彼等は車の轍をつけて行つて、伊蘇凱は自分の弟に「この女から善い子供が生れるだらう。」と言つて、車の轍をつけて行く中に、岱齊郭特(秘史)史泰赤兀暢)の男 Üria (伊克齊埒圖塔々兒部の人とす。秘史は也客赤列都メルキト部の人

とす。妻 Ugeien ehe (烏格楞哈屯、秘史訶額命兀眞)を、鄂勒郭諾特の turgim の地から連れて歸る所である。追いついて、伊蘇凱は二人の弟に云ふに「この人を討たう」と云ふ間に、烏格楞哈屯は、自分の夫に云ふのに「汝知るか。Tohar(?)の三人の子供の性悪し。汝歸れ」と着て居た下着を解きて與へる中に、兄弟三人で手を下して討つた。齊埒圖を、三つの河を渡るまで、三つの岡を越すまで追つて、追附かなかつた爲に、伊蘇凱は烏格楞哈屯を奪つて勞つて取つて、家に歸つて行く時に、烏格楞哈屯泣いて行くに、達哩岱諤濟錦云ふに「三つの河を渡つた。三つの岡を越した、捜さんとしても跡なし、望まんとしても家なし。涙を流せども(泣く)聞ゆるなし」と云へば、この言葉を烏格楞哈屯聞いて、やつと聲なく行つた。烏格楞、伊蘇凱の家に行つて、長男特穆津を生んだ。續いて哈薩爾 Hašaru (哈濟錦) ušaru (諤楚肯)等三人を生んで、凡て四人の子がある事となつた。一日伊蘇凱は特穆津をつれて母方の伯父の所なる鄂勒郭諾特に嫁を捜してやらうとて行く時、遂に 秘Deisečen 岱徹辰 秘史德蔴禪) は、「彼等に」會つて尋ねるに「却特秘史奇牙暢) 本家の博爾

濟錦秘(史李兒只斤) 姓ある親家と子息、汝等は何處に行くか」と尋ねるに、伊蘇凱答へて「只子供特穆津を鄂勒郭諾特に導いて行く」と云ふに、岱徹辰は云ふ「今夜一羽の白い海青を我掌に握る夢を見た。夢は却特本家の博爾濟錦姓ある汝等の吉兆であると云つたので、汝等我家に行け。我に布爾德秘(史李兒帖)と名附くる九歳になる秘史十歲) 娘あり、汝の子に與へよう。昔我等の地の風習として、美しい娘を大車哈萨克(哈萨克 tege)に乗せて、黒い牡駱駝に曳かせて、遍き汗の皇后となす例であつた。蒼白の牡駱駝に曳かせて高い高い床の上に座せしめて、國の主となす例であつたぞ。」と云つたので、伊蘇凱は獨り子供を、岱徹辰に一對の馬と共に殘して置いた。去るに臨んで「私の子供は犬から秘(に)憶病である。憐んで可愛がつて暮せ。」と云つて歸つた。返る途に塔塔兒の民に立寄つて、丁度集つて宴して居るのに「行き遣はして」伊蘇凱が思ふに「恐るべき民だ。如何にして隠れて行かうか」と、出來ないで居る間に「塔々兒の民は」食物に毒を混じて與へた。伊蘇凱は遽しく己が家に歸つた。直に Manglik (莽古里克)を探して來て云ふのに、「恐るべき民に立

寄つて行くに、味善き食物に毒を混じて與へた。鶴吉喇特(秘史翁吉喇特)の岱徹辰に、獨子特穆津を残して置いて來た。早く行つて連れて來い」と云つた。莽古

里克は、馬を驅けて行つて、特穆津をつれて來る前に、伊蘇凱は崩じた。
(第一回完了)

赤峰 先史時代遺蹟の發掘

赤峰の發掘は東亞考古學會のもとに、我が濱田博士を首班として、數名の専門學徒に據つて、去る五月末より約一ヶ月間に亘つて行はれた。其の場所は内蒙古赤峰の紅山(ウランハダ)と稱する高臺である。此の地の遺蹟に就いては既に二三の邦人や佛國のリサン師などによつて紹介されて居たのであるが、學術的な調査は今回初めて行はれたのであつた。

先づ發掘された多數の墳墓は花崗岩を用ひて、簡単な石棺を作り、中に死者の遺骸が伸展葬によつて納められて居る。猶副葬品としては、土器類・有孔石斧・骨鏃・銅鏃等の利器、或は小玉の如き裝飾品を含んで居るが、其の内容は貧弱である。然し、高形土器や有孔石斧の如き特色ある器物の存在が注意され、又金屬器などのあるところから、この遺蹟が金石併用期に屬して居ることが知られる。

この他、墳墓以外の地に於ては細石器及び土器の類が採集され、この土器類には赤の上に黒或は褐色を以つて彩色した所謂彩色土器も含まれて居り、石器時代に於けるこの地と甘肅地方の關係の深かつたことを示して居る。

偕て、細石器使用の人種と墳墓營造の人種との關係に就いて未だ不明ではあるが、墳墓營造の人種は支那の文獻に見ゆる烏桓鮮卑などと稱する東胡民族に屬するものであることが推定されて居る。猶右の發掘に關しては、京大夏期講習會に於て、濱田博士が「熱河の旅と赤峰の發掘」と題して幻燈を用ひ特別講演をされた。

(小野記)